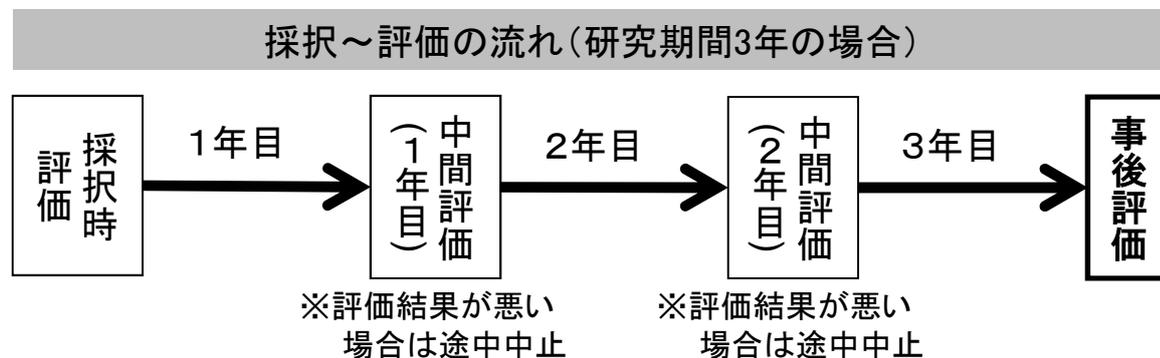


令和元終了課題の事後評価について(概要)

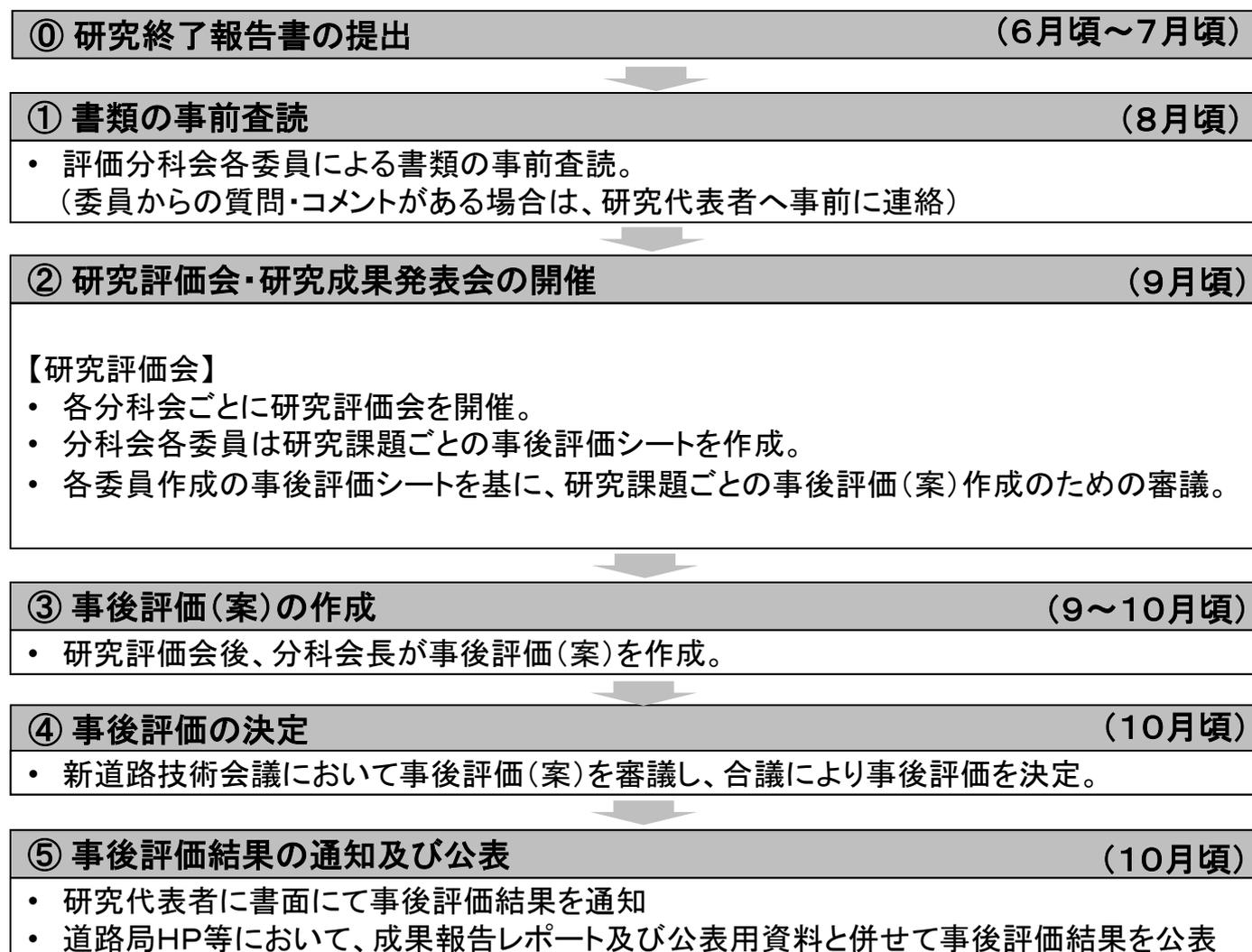
1. 位置付け



2. 目的

- ・ 研究課題の目的達成度や研究成果等を適切に把握し、研究成果の道路政策への反映見込み等を評価
- ・ 今後の制度全体の評価や見直し等に活用すること

3. 手順(スケジュール)



4. 評価の視点

研究の 視点	研究目的の達成度	研究目的に照らして、その達成の度合いはどうか。
	研究成果	評価できる研究成果を上げたか。研究成果が当該研究分野等の発展に寄与できたか。
	研究成果の活用・発展性	得られた研究成果の活用や発展性などの今後の展望はどうか。研究成果の積極的な公表・普及に努めているか。
行政の 視点	道路政策の質の向上への反映見込み	研究成果の実務への反映見込み等、道路政策の質の向上に資するものとなっているか。
	研究費規模とその成果	配分された研究費規模に見合う、研究成果及び道路政策の質の向上への寄与となっているか。

5. 評価基準

評点	説明
A	研究目的は達成され、十分な研究成果があった。
B	研究目的は概ね達成され、研究成果があった。
C	研究成果は一部に留まった。
D	研究成果があったとは言い難い。

6. 対象研究テーマ及び担当分科会

分科会	領域	タイプ	採択年度	委託研究テーマ	研究代表者	研究概要
ソフト分科会	-	IV	H29	自動運転と道の駅を活用した生産空間を支える新たな道路交通施策に関する研究開発	室蘭工業大学 准教授 有村 幹治	北海道の農林水産業・観光業を担う「生産空間」では、人口減少によって公共交通や物流の維持が著しく困難化している。本研究は、「生産空間」に住み続けられる道路交通環境を目指し、自動運転や道の駅の活用の実装を含む道路交通施策のあり方について研究開発を行うことで、同様の問題に苦しむ全国各地域への貢献を目指す。
	-	IV	H29	対流型地域圏における自動走行システム普及に向けた新たな道路ストック評価手法	東京大学 教授 原田 昇	中山間地域の人流・物流ネットワークへの自動走行システムの導入・普及を目指し、道の駅を拠点とする自動運転サービスの実用化を目指した実証実験を通じて、自動運転に対応した道路インフラと地域の小さな拠点となり得る道の駅が有すべき機能を明確化し、自動走行対応型道路ネットワーク整備計画の立案と、ストック評価のためのデータプラットフォーム及び自動走行対応型道路の路線計画評価モデルの開発を行う。
	1	I	H29	質の高い交通時代のモビリティの価値の計測手法開発に関する研究	広島大学 教授 藤原 章正	異なる時間価値や時間制約を持つ移動主体が共生する超高齢社会において、交通の時間価値の計測方法を再構築する。この手法を3つの事例研究へ適用し、質の高い交通時代の道路事業の包括的評価手法の有用性についてフィールド実験を通じて検証する。
	3	I	H29	観光流動把握を目的とした交通流動推定システムの研究開発	京都大学 教授 宇野 伸宏	観光流動の把握を主たる目的とし、ETC2.0、携帯電話系データ、経路探索履歴データなど様々なビッグデータを利活用し、観光トリップを主とした都市内の移動に関して、そのトリップパターンおよびトリップチェーン流動を推定するシステムを開発する。

分科会	領域	タイプ	採択年度	委託研究テーマ	研究代表者	研究概要
ハード分科会	-	IV	H29	耐候性鋼橋梁の診断・補修技術の高度化についての研究開発	山口大学 教授 麻生 稔彦	本研究開発では、耐候性鋼橋梁の効率的かつ合理的な維持管理を可能とするために、耐候性鋼材の腐食の診断技術および補修技術の体系的高度化を目的とし、診断補修マニュアルの構築を目指す。これにより、耐候性鋼橋梁の維持管理費の縮減が可能となる。
	-	IV	H29	部分係数設計に向けた塑性化を考慮した鋼桁設計法の研究開発	長岡技術科学大学 准教授 宮下 剛	本研究は、断面の一部塑性化を許容した鋼桁の耐力特性を実験および解析により把握することを目的としている。さらに、各国の鋼橋の設計基準を分析し、現在の道路橋示方書では具体的に記述されていない、部材の一部塑性化を考慮した鋼桁の設計法の開発を行う。